

生駒市農業ビジョン推進懇話会 第17回会議録 (要点筆記)

1. 開催日時 令和3年3月23日(火)～令和3年3月29日(月)
(委員への書面意見の提出依頼から、意見書提出日まで)
2. 開催場所 書面開催
3. 参加者 池上氏(座長) 井上氏(副座長) 田中氏 小北氏 高枝氏 中本氏
藤原氏 小西氏 吉田氏 中世古氏 中村氏 浅井氏
4. 会議の公開・非公開 公開 傍聴人数 なし(書面開催のため)
5. 議題 (1) 生駒市農業ビジョン実績表について
(2) 大北地区「人・農地プラン」について
6. 審議内容

(1) 生駒市農業ビジョン実績表について(委員意見)

- ・遊休農地が前年から10ha、前年比で25%増と急増し、一方で活用事業の実績が5haにとどまっている。遊休農地対策は待ったなしの状況に入っている。「農地プラン」に対する意見でも記載したが、従来型の手法＝認定農業者等の農業「担い手」に頼る手法では限界が来ている。ソーラー・シェアリングや福祉農業など農業の幅を広げる取り組みと遊休農地対策を連動させる必要がある。
- ・集積された農地は5ha強であるが、筆数は152にも及んでいる。1筆当たり10aに満たない狭小農地なので、スケールメリットが働きにくい。1筆の規模を大きくすることは物理的にも費用的にも非現実的なので、この点からも大規模土地利用型を想定している農業「担い手」への集積には限界があるので、新しい視点からの対策を考慮していく時期に来ている。
- ・現在、政府が推進し、かつ実際に開発されているスマート農業技術は基本的に大規模経営でないと対応しにくい。生駒市のような小規模農家が大半のところでは過大な投資になる恐れがある。農業者のニーズを把握し、それをメーカーなり試験場なりにつないでいく努力が大切だろう。
- ・農地バンク提供希望者185人の内訳を知りたい。残りの農家は自前で維持管理できる見込みがあるのか、そうであれば問題は少ないが、見込みが低いのに提供したくないとすればそれはなぜか理由を分析する必要がある。まだ新しい制度なので、もっと徹底した周知が必要なのかもしれない。
- ・人が集まる行事、活動は軒並み開催できない状況が続いている。一部でも、インターネットを活用したウェブ上のワークショップを試みてもよいのではないか。
- ・全国的には、コロナ禍の下で、農産物需要や店舗購入の回避(ネット購入、個別配送サービス利用や生協宅配など)が生じているかもしれない。この点で、自治会での移動販売への消費者反応を知りたいところである。要は、こうした状況変化が地場野菜流通や消費を拡大させるチャンスであると捉えて機敏に対応することである。
- ・市民農園の空きがかなり多いが、在宅勤務の増加などで全国的には需要が伸びている。生駒市ではなぜ低調なのかを分析し、対策を検討されたい。
- ・有害鳥獣のうち、ハクビシンやアライグマは捕獲しても利用法がないので難儀な問題である。生態系管理の方法を調査研究してみる必要があるかもしれない。

- ・遊休農地発生防止対策の推進として JA ならけんと連携した遊休農地の耕作指導の実績が空欄になっていますが、今後継続してこの事業を進めたら良いと考えます。只、今になって（個人的には 15 年前くらいに必要だった）は求める人がいるのかの懸念もあります。高齢化が進みすぎている。
- ・環境団体のひとりとして毎回思うのですが、市街化調整区域での農地は農地としての活用より駐車場や資材置き場として利用されることが多く年々環境・景観がそこなわれています。「法の改正」にしか解決する方法が無いと言われ懇話会参加者として意味がないと感じています。
- ・各項目の着実な進展が望まれる。
- ・遊休農地活用事業の利用者が増えているようで、更なる遊休農地の活用を期待する。
- ・朝市（ベルテラス・自治会）など販売する機会が増え、今後も積極的に取り組みたい。
- ・学校給食食材にも出荷できるよう努めたい。
- ・施策 4（3）食農教育と環境にやさしい農業の促進・推進のところで保育所になんじんジャム等を定期的に卸して食べてもらっているが、啓発事業としてもとりあげてもらい実績に入れてもらえないか。
- ・農福連携の促進は単に障がい者の就労支援というだけではなく、地域とのつながりや啓発事業にもなっています。
- ・新規就農者の農業参入はスタート地点での若い方々（新規就農者）の貴重な意見の努力の賜物 - これからも応援したい
- ・新しい農作物のチャレンジ、その利用法食べ方等も早目にスタート
- ・農家高齢化に追い付けない現状で早期の取組み（遊休農地）
- ・狩猟免許取得の若い人達の育成
- ・遊休農地利用者の横の繋がり、前進目的
- ・畑をやったことのない人達が突然 1 筆の田んぼをあてがわれても使いこなせない
- ・出来た農作物の食事会等親睦を深める取り組み
- ・市民の田植え（ぬかるみに足を取られながらの）稲刈りは魅力的。普段デスクワークばかりの人達にはこれらは贅沢な時間となる・農家の方々との交流
- ・大勢の市民を巻き込む。これは生駒市の特権（新しい農業ビジョン）
- ・身近な所で楽しかった・面白いという企画をどんどん発信していく
- ・未来の子供たちに農業の楽しさを提供していく（定期的に 1 年を通じてやっていく）
- ・地場野菜販売など 1 年を通して作付けを考える（計画的）
- ・ひっぱりついていく指導的立場の人がいればついていく農家の方が多いのではないかな。又、自分達で得する者を得ようとする努力が薄い。古い体制を変えていく。

（2）大北地区「人・農地プラン」について

- ・プランの策定にこぎつけたことは評価したい。
- ・農地引き受けの農業者は施設を含む園芸部門であり、それだけで貸しつけ希望をカバーすることは難しい。土地利用型農業については、規模拡大メリットが限定される条件下では従来型の手法では限界があり、別の対策が必要だろう。たとえば、ソーラー・シェアリングを含む複合的な農業などを検討する。
- ・どの地区においても、後継者の悩み、不安があるのでぜひ成功例、模範となるものを示してほしい。
- ・農業者の高齢化が進む中、農地集約化の具体策作りが必要
- ・今後当該人・農地プランに基づく農地の活用等を期待する。
- ・イノシシによる農作物の被害が拡大しており、より積極的な対策が必要だと思います。
- ・いくつかの部会のような組作りをし、今迄のビジョンを確実に実行していく体制作り